ていた。 られて、武士と認められ き、これらが家禄を与え これに上士・下士と続 では家老・中老が大夫、 家老格の下である。岩国 七百、中老のそれは六百 家老の石高は千ないし まず中老だが、これは

緑地帯

何した人?と読者は思わ

きえ、と、読まれたし。

"ちゅうろういまだゆ

れるかもしれない。

高遠 信次

ために中老の上席六百石 生まれたが、二男だった 天保三(一八三二)年にし、取次方頭・大組頭・ 有する者に限られてい 二宮錦水に詩文を、師範 今田・益田・香川の姓を かつ家老は宮庄・ 戸・ ないし三百と定められ、 石の粟屋雅楽の子として 靱負は中老の末席三百 幕末の岩国 玉乃九華に漢籍を、教授 老館の一期生として学頭 される。成長後は藩校養

の今田帯刀家へ養子に出 吉香神社の場所)<br />
に勤務<br />
つかった証しであろう。 出頭役の職を歴任し、か び、卒業後は藩庁(今の つ藩主の名代まで務め 戦争前夜、広島国泰寺(今 4 五)年十月、第二次幕長 藩主吉川経幹の信頼があ の白神社東隣)にて、幕 靱負は慶応元 (一八六 れた靱負は病に倒れ、戦 室木口先鋒隊長に任じら

ったと考えられる。 える時間稼ぎの効果があ 逆に長州の戦闘態勢を整 軍の戦力配備を遅らせ、 幹に続くこの糾問は征長 が書き連ねられている。 ず、ただ自らの無能のみ 病について何も触れられ されているが、それには 靱負の美学と矜持を、私

第3席受賞者=広島市)

(第39回中国短編文学賞

有坂隆介に西洋砲術を学 靱負が任じられたのは、 中老今田靱負 つ今田とはいえ中老格の だから、粟屋の出で、か 老が任じられるのが通例 名代は藩主の一族か家 ともに弁明に務めた。経 対して、三支藩主名代と 反させようという思惑に 志の、岩国を長州から雕 府糾問使の大目付永井尚 だが幕府再征に備えて 蔵で病死する。経幹他界 は垣間見る思いがした。 のほぼ半年前である。 いに臨むことなく三十五 『吉川経幹周旋記』に残 靱負の名代返上願が